

二〇二六年度 入学試験問題 国 語〔現代の国語、言語文化〕（古文・漢文は除く）

二月三日

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
- 二、この冊子は十六ページある。
- 三、解答用紙はマークシート式解答用紙一枚で、別に配付する。
- 四、本冊子に、脱落、印刷不明瞭がある場合は、本試験中に試験監督者に申し出ること。
- 五、この教科を事前に申込みしていない場合は、受験できない。
- 六、受験する教科は受験票に記載してある教科で、本日教科の変更はできない。
- 七、マークシート式解答用紙の記入上の注意
 - ① 解答する科目のマーク欄を正確にマークすること。
 - ② マークシート式解答用紙の解答番号は四十五問までであるが、問題の中にある設問数まで解答すること。
（問題の中にある の数字が解答番号に対応している）
 - ③ 解答には、黒鉛筆またはシャープペンシルを使用すること。
 - ④ 一度記入した解答を訂正する場合は、消しゴムで完全に消してから記入しなおすこと。
 - ⑤ 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、汚したりしないこと。
 - ⑥ 解答欄への記入は、マークシート記入例にしたがって、正確にマークすること。
- 八、右記の注意を守らない場合は、採点できないことがある。
- 九、試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

一 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

その年、高知県庁観光部に「おもてなし課」が発足した。

観光立県を目指し、県外観光客を文字通り「おもてなし」する心で県の観光を盛り立てようというコンセプトそのままに、親しみやすさを狙ってその課名はついた。

【ア】おもてなし課に配属された職員は、よくも悪くも公務員であった。――悲しいほどに。

県の観光発展のために、独創性と積極性を持つてどんな企画を立案してほしい。知事からはそのようなクンジ⁽¹⁾があった。

しかし、観光発展における独創性と積極性とは一体いかなるものなのか。今まで県庁各部署の【イ】内ではしか行動したことのない彼らには、非常に想像の及びにくい部分であった。

熱意がなかったわけではない。決して。

しかし、未知の分野における成果を求められ、彼らの腰は重く、動きは鈍かった。

「何ですか、観光発展のイベントとして『観光特使』という制度を手始めに導入する自治体が多くあるようですよ」

おもてなし課が発足して一ヶ月、ああでもないこうでもない^Bと会議がワルツを踊っていた中でそう言い出したのは、掛水史貴^{かけみずふみたか}である。入庁三年目の二十五歳、おもてなし課の中では一番「若い」職員だ。

もつとも、おもてなし課は独創性と積極性を期待された課であるため、課長でもやつと四十歳という若い編成だが。

「何で、その『観光特使』ゆうがは」

尋ねたのはその四十歳の課長、下元邦宏^{しももとくにひろ}だ。

課員の注目が集まる中、掛水はタベネット⁽²⁾で拾ってきたばかりの知識をうる覚えでヒロウした。

「いや、僕もようは知らんがですけど。なんか、県出身の有名な……芸能人とかスポーツ選手とか、そういう人を『観光特使』に任命して、県の魅力をPRしてもらうがやそうです」

「おお、それはいいにやあ」

踊る会議にダレ気味だった下元が身を乗り出した。他の職員も同じくだ。

「県から出た有名人ならけっこうおるぞ」

「漫画家や作家も多いですよ、それにスポーツ選手だって……」

あの人もそうだ、この人もそうだとしはし会議が盛り上がる。

「待て待て、誰か控えちょけ」

下元の指示で女子の一人が次々挙がる名前をホワイトボードに書き付けていく。名前が出尽くした辺りで職員十二名全員がそのボードを眺めた。

「なかなかの陣容やないか、こらあ」

出来上がったリストを眺め、下元が満足そうに頷く。

三十名ほど挙がった名前は、芸能関係からスポーツ関係、作家、漫画家と幅広い。

「それでPRはどうやってもらうがな」

「ええと、何か『特使名刺』を作って、その名刺の裏をいろんな観光施設に入れるクーポンにして特使に配ってもらうようにしちよった自治体があったと思います」

「なるほどなるほど。それは割引きか無料か」

「いや、そこまでは……自治体によるがやらないですか？」

掛水がそう返すと、別の職員が口を挟んだ。掛水の二年先輩にあたる近森だ。

「割引きらあてケチなことしたらバカにされますろう。ここはウに無料で行かなあ」

「それもそうやにゃあ、じゃあ観光施設はどこにするで」

活気に満ちたディスカッションをしていると信じている彼らは気づいていなかった。

すでに他の自治体で定番化している制度を取り入れ、応用しているだけのことに独創性など欠片かけらもありはしないことを。

——彼らは実に、悲しいほどに、どこまでも「公務員」であった。

そして、おもてなし課・観光特使制度は始動した。

高知城や郷土資料館を筆頭に、県内各地の観光名所を『特使名刺』の無料クーポン対象候補として協力を要請。並行して利用条件の試案を作成する。回数と期限は無制限、人数を1枚につき五人までとすることがザンティ案(3)となった。ただし県民は除外である。

さらに県出身の著名人をピックアップし、連絡先を調べる。そして一人ずつ打診だ。

地道な作業だったが、これでおもてなし課としての企画が一つ始動すると思うと職員の意気は揚がった。企画を提案した掛水は特に熱心だった。

「お願いします。○○さんが県外の方にお会いしたときに、特使名刺をお渡しして趣旨を説明してくださいだけでいいんです」

打診した著名人は、工特使を引き受けてくれた。自分でどれほど役に立てるか分からないけれども、という前置き付きではあったが（そして、その意味をおもてなし課が認識するのはもう少し後の話になるのだが）。

順調に観光特使が増え、ますます張り切って次の候補者にアプローチをかける。

そんな日々の中――掛水は突然、意欲に水を掛けられた。正に彼の名前の字面のとおり。

関東在住の県出身作家に、出版社から教えられたメールで打診をしたときである。

掛水の元に届いた返信は、オだった。

『高知県観光部おもてなし課 掛水様

メール拝見しました。

企画の趣旨が今ひとつ理解しづらいので電話でご説明を伺えますか？

こちらの電話番号は○○○○○○○○○○です。

よしかなど きょうすけ
吉門 喬介』

単純な企画である。趣旨が理解できないというのは解せなかった。しかし、とにかく相手は説明を求め、電話番号も書いてきている。

掛水はその番号に電話を掛けた。

数回のコールの後、電話に出たのは眠たげに唖れた男の声だった。

「もしもし、こちら高知県観光部おもてなし課の掛水と申しますが、吉門喬介さんは……」

「あー、ハイ、俺……じゃねえや、私、です」

だるそうな喋り方は寝起きなのか元々か。時間帯はデイトタイム真っただ中だったが、作家などの特殊な職業では生活時間帯が逆転しているという話もよく聞く。

プロフィールで公開されている年齢は掛水より三歳上だ。

「観光特使についてのご質問をいただきましたのでお電話差し上げました」

「あー、あれねえ。いくら考えても分かんないんですよねえ……」

かったるそうな喋り方はどうやらカらしい。

「ええと、分からないというのはどの辺りが……」

「観光特使って制度の実効が」

いきなり横つ面をはたような疑問が来た、と思うや吉門は「キ」口調はそのままに、掛水が即答できない質問を次々投げた。

「説明メール読むと特使が県外の人に名刺を配ってくれてことですよ。一枚一枚ちまちま手で配って、特使一人につき一体どれだけ捌けると思います？　そんでもらった人がどれだけホントにその名刺に釣られて高知に行くと思います？　それを考えるとね、どうも実効が薄いつつーか、あんまり効率的じゃねーんじゃないの？　とか。この特使制度が目指すところって結局どこなんですか？」

だらけた口調とは裏腹に、吉門の指摘は何もかも「ク」すぎた。

「そ、それは……県の観光発展のために……」

「うん、ですからね。観光発展イコール観光客を増やすって意味なら、ちょっとこれは非効率にすぎるんじゃないの？　って、そこでどうも引つかかっちゃって。『おもてなし課』なんてネーミングは面白いし、お役に立つなら特使になるのはやぶさかじゃないんですけど、自分じゃどうにもこの特使って制度の実効が分からなくて。担当の方に直に訊いたら分かるのかなと思ってご連絡差し上げたんですが」

掛水は返す言葉を失った。何一つ——答えられない。

「観光特使なんて、もうあちこちの自治体がやってるし、ぶっちゃけ後追いですよね。名刺のクーポンなんかよそでも散々やってるし」後追い。その言葉でトドメを刺された。

完全に沈黙した掛水に、吉門は「ごめんなさい、怒っちゃった？」と妙に馴々しい執り成しを入れた。いえ、と答えるのが精一杯である。「別に後追いしたって悪くないんですよ。ただ、後追いすんなら個性を出さなきゃ陳腐なだけなんですけど、この制度で高知が打ち出す個性って何かなあって、それが見えなかったただけで」

見えなくて当然だ。そんなもの最初から考えていない。

ただ真似できる手頃なアイデアがあったから借りてきただけで。

県の観光発展のために、独創性と積極性を持ってどんどん企画立案してほしい。おもてなし課設立時のそんな理念も空しい。

「……すみません、そこまでは考えてませんでした」

電話の向こうで吉門が困ったような溜息を吐いた。やがて、「ごめん」と一言。「なさい」が取れた。頼む、謝ってくれるな。それが一番痛い。

「えーとさあ、県が観光客をおもてなしますって意図での設立は面白いと思うんだよ。初心に返ったっていうか。『おもてなし課』って名前もインパクトがあつていいしね。だから俺が特使制度に噛むとして、一番高知に貢献できるとしたら、俺こんな仕事してるでしょ？」

吉門はもうすっかりタメ口だ。

「出版社とか新聞社とか、とにかくマスコミとの接点は多いわけ。だから、取り敢えず名刺を五、六箱もらえる？」
は？　と思わず声が出た。観光特使の実効をこれだけヨウシヤなく否定された直後なだけに。

「いや、だから。現時点で俺が唯一この特使制度と特使名刺の効能を見出すとしたら、無差別絨毯爆撃しかないんだよな」
無差別絨毯爆撃。意味が分らない。

「要するに、『高知県におもてなし課というものが発足しました、この名刺が観光名所の無料クーポンになりますんで、もし高知に足を伸ばすご予定がございましたらどなた様でもご自由にお使いください』つって、出版社や各種バイタイに箱ごと渡す。実際に使ってもらえるかどうかより、高知におもてなし課ができましたってことをマスコミに草の根アピールするほうがまだ将来的に何か繋がる可能性があるんじゃないかと思うんだけど、どう？」

「ハイ……それじゃ、観光特使の任命は受けていただけるということで」

「ああ、それは別に。断る理由もないし」

ありがとうございました、と最後の気力で呟いて、掛水はケ電話を切った。

独創性と積極性。

それはああいうものを言うのだろう。吉門は数年前にデビューしてそれなりに名前が売れている作家だ。専業だというからそれこそ創作で食っている。

だからコも実効性も甚だ薄いこの企画に、すぐさまこれだけの駄目出しをすることができたのだろう。
電話を終えてから吉門の指摘を報告すると、課内の意気は盛り下がった。

「確かに……県内在住の人らあは、知名度があっても県外の人と再々会うかとゆうたらなあ」

「隠居しゆう方もおりますしね」

「県外で活動しゆう人らあも義務やないがやき、特使名刺をどればあの扱いにしてくれるかは未知数やきにゃあ」
自分でどれほど役に立てるか分からないけれど。その前置きにはそういう意味も含まれているのだろう。

（有川浩『県庁おもてなし課』角川書店）

問一 傍線部(1)から(5)の漢字と同じ漢字を用いるものを、次の各群の①から⑤の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

(1) クンジ

- ① ヒョウジを変える
- ② ジビョウを治療する
- ③ ジドウカンを利用する
- ④ ジジツを明らかにする
- ⑤ ジメンを堀る

1

(2) ヒロウ

- ① ヒガイを受ける
- ② 結果をヒカクする
- ③ ヒフの病気にかかる
- ④ 心情をヒレキする
- ⑤ 体がヒロウする

2

(3) ザンテイ

- ① テイサイを整える
- ② テイチョウに断る
- ③ テイキ預金をする
- ④ サイテイゲンのルール
- ⑤ 間違いをテイセイする

3

(4) ヨウシャ

- ① キシャカイケンを開く
- ② オンシャを行う
- ③ ジドウシャを買う
- ④ ドシャ崩れに巻き込まれる
- ⑤ シャザイ会見を開く

4

(5) バイタイ

- ① 所得をバイゾウさせる
- ② 商品をバイバイする
- ③ ショクバイに浸す
- ④ バイシンインの判断
- ⑤ 植物をサイバイする

5

問二 空欄「ア」から「コ」にあてはまる言葉として最も適切なものを、次の各群の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

ア	① だから	② いわば	③ ゆえに	④ さらに	⑤ しかし	ア	6
イ	① 哲学	② 思想	③ 伝統	④ ルール	⑤ ムード	イ	7
ウ	① 狡猾	② 慎重	③ 太っ腹	④ 消極的	⑤ 全体的	ウ	8
エ	① しゅしぶ	② 快く	③ 自慢げに	④ 気丈に	⑤ わくわくして	エ	9
オ	① 微妙	② 快諾	③ 完璧	④ 明瞭	⑤ 饒舌	オ	10
カ	① 丁寧	② 建前	③ 上っ面	④ 横柄	⑤ 地	カ	11
キ	① だるい	② 滑稽な	③ 快活な	④ 流暢な	⑤ 軽率な	キ	12
ク	① 曖昧	② 暴力的	③ 無礼	④ 的確	⑤ 奔放	ク	13
ケ	① 高揚して	② 感激して	③ 嬉々として	④ 力なく	⑤ 憤慨して	ケ	14
コ	① コスト	② 協力関係	③ レベル	④ 準備	⑤ オリジナリティ	コ	15

問三 波線部A「よくも悪くも」とあるが、どのような状態か。最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

16

- ① 独断的ではあるが、創造的な活動を行うことができる
- ② 多くの人の意見を聞きすぎて、一向に企画が実施されない
- ③ モチベーション高く、創造的な活動の提案ができる
- ④ 創造的な活動のアイデアは潤沢だが、モチベーションが低い
- ⑤ 観光立県への熱意はあるが、創造的な活動の提案が困難

問四 波線部B「会議がワルツを踊っていた」とあるがどうしてか。適切でないものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

17

- ① 企画に対する経験が不足していたから
- ② 企画に対して積極的になりきれない状況があったから
- ③ 企画に対するアイデアが湧かなかったから
- ④ 会議のテンポがよく心地よかったから
- ⑤ 会議の方向性がメンバー中で共有されていなかったから

問五 波線部C「やぶさかじゃないんですけど」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

18

- ① 強く頼まれているのは嬉しい
- ② 気が進まない
- ③ 快く承諾したい
- ④ 断固として断りたい
- ⑤ 条件について納得できない

問六 波線部D「ああいうもの」の意味として適切でないものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

19

- ① 無差別絨毯爆撃という方法への指摘
- ② 掛水に対する企画の意図の確認
- ③ 特使制度に対するアドバイス
- ④ 特使制度に対する欠点の言語化
- ⑤ 掛水に対する敬意

問七 本文における掛水の心情と合致するものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- ① 自分の企画が採用されて嬉しくて仕方がない
- ② 課内での議論は不毛だと感じている
- ③ クーポンの特典は無料の方がよい
- ④ 吉門の提案は、無礼で聞き入れることができない
- ⑤ 特使制度には期待している

二 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

一九世紀自然科学主義

優生学の歴史は、チャールズ・ダーウィンのいところであるフランシス・ゴルトンから始めるのが普通である。それはゴルトンが、一八八三年に『人間の能力とその発達の研究』という本の中で、優生学 (eugenics) という言葉を鑄出したからである。そのため彼は優生学の父と呼ばれてきた。

しかしこの点をあまり強調しすぎると、優生学の歴史を読み誤ることになる。ここではゴルトンは、eugenics をギリシャ語で「良いたね」を意味するとし、一般の生物と同様に人間の優良な血統をすみやかに増やす諸要因を研究する学問的立場、と漠然と述べただけであった。

ゴルトンは、人間の才能がどの程度遺伝に因^よるのかを明らかにしようとして、その研究生活の早い時期から **ア** に関する資料を集め、統計学的手法でこれを解明しようとした。しかし、優生学を本格的な学問として展開したのは、晩年になってからである。彼は一九〇一年の人類学会で、「既存の法と感情の下における人種の改良の可能性」という論文を発表し、関係者から好意的な感觸を得た。これが自信となり、一九〇四年にロンドンで開かれた第一回イギリス社会学会で「優生学——その定義、展望、目的」という講演を行った。

こうして優生学は、二〇世紀という新しい時代の幕開けとともに多くの知識人の心をとらえるようになったのである。それにしても、なぜ発表の場が第一回社会学会であったのだろうか。この点を理解するためには、その背景に目を向けなければならない。

優生学史を語るには、どうしても、一九世紀後半の、**A** 欧米世界における知の構造的變動までを視野に入れる必要がある。一八五九年の暮れにダーウィンの『種の起原』が出版されるまでの長い間、生物学とキリスト教とは濃密な **イ** 関係にあった。生物や人間の合目的性こそは、創造主が存在することの有力な物証と考えられたからである。ところが、この本の出現によって、キリスト教的な自然解釈は大きな打撃を受けた。しかもこのことは、キリスト教信仰と同時に与えられていた安定した世界解釈や、それに立脚した人生への指針、倫理の基盤などを連鎖的に崩壊させていく危険を含んでいた。西欧人は深刻な哲学的混乱に陥った。

生物学としての進化論は、まもなく多くの科学者が認めるところとなったが、自然科学とキリスト教信仰との間に生じてしまったキレツを、世界観としてだけではなく、倫理や魂の救済をも含めた、全哲学の中のどの次元の問題と考えるかで、その危機の意味も異なっていた。この危機に対処するためにさまざまな哲学が試みられたが、その流れの一つが **B** 一九世紀自然科学主義とでも呼ぶべき傾向である。

ここでいう自然科学主義 (scientific naturalism) とは、人間のふるまいやその社会までも含む一切の現象を、非擬人主義的、非超自然的、自然科学的に統一的に解釈しようとする哲学的傾向のことである。具体的には、唯物論、一元論、自然主義、実証主義、自由思想、不可知論などの基本に流れる姿勢で、一言でいえば、キリスト教的世界解釈の崩壊の後を埋める一群の経験論的な代案のことである。

社会ダーウィニズムとは何か

こうして一八七〇年代以降、人間やその社会を、ダーウィンの原理を通して解釈しようとする試みが現れはじめた。一九世紀末から第一次世界大戦の直前まで大流行したこの一群の思想を、ここでは一括して社会ダーウィニズムと呼ぶことにする。

この時期、イギリスではT・H・ハクスレーが、ドイツではエルンスト・ヘッケルが、何十年にもわたって、人間とサルとの連続性を繰り返し説いてまわった。そして、この進化論のケイモウが成功すればするほど、社会ダーウィニズムも砂に水が染み込むように浸透していった。先鋭的な知識人は、たったいま宗教的迷妄を打破してみせた自然科学こそ、ウで確実な新しい倫理や生活規範の根拠を提示してくれるものと信じた。彼らは、社会科学の分野でおびただしい数の社会ダーウィニズムの諸学説を産出し、さらには自然科学に立脚した新しい生活改善運動を生み出していった。それは、教育改革にはじまり、婦人解放であったり、社会主義的運動であったり、優生学や公衆衛生であったりした。

このように、一九世紀後半から二〇世紀前半にかけて、西欧の価値体系のなかで自然科学は非常に高い地位にのぼりつめた。これこそ、社会ダーウィニズムが大流行をした根本原因である。そのなかで優生学は、進化論と遺伝の原理を人間にも応用しようとする立場にあった。優生学は、新興の自然科学によって人間みずからがその自然的運命を改良しようとしたものであり、見方を変えれば、キリスト教的救済③シカンの世俗化でもあった。

第一次世界大戦以前の欧州社会では、この思想的変動はほぼ知識人内部にとどまっていたが、第一次大戦によってそれまでの一九世紀的な社会規範が崩された結果、この種の思想が一般社会に向かって大量に流出したのである。その意味でも、近代と現代の境目は、第一次世界大戦にあった。一九世紀後半におけるコスモロジーの崩壊と、これに対する代案を構築する努力や世紀末の不安、これらは、基本的には知的教養人の次元での出来事であった。その知的産物が、現実味のある新提案として社会に受容されるようになったのは、第一次世界大戦で旧来の価値観や諸制度が、否応なく崩れたためであった。ワイマール文化の驚くべき多産性と急進性は、この構造的な不安定さと裏腹の関係にあった。ヒトラーの度外れたラジカリズムも、ワイマール・ラジカリズムの鬼子であった。こうして一九二〇年代には、多くの国で優生政策が議論され、一部実施に移されるようになった。

なぜ自由の国アメリカで優生学は広まったか

その中で、もともと社会全体を貫く規範がエ国があった。移民の国、アメリカである。「自由の国アメリカ」とは宗教自由の意味である。アメリカは構造的に多元化社会であり、社会全体を包含する見えない歯止めとしての共通価値が存在しにくい。だから社会的に拘束力ある規範を求めるとなると、どうしても法律、実際には各州ごとの州法を作ることになる。アメリカ社会は法律をオ主義的

に用いる、といわれるのはこの点にある。このような社会では、自然科学に立脚するとみえる見解が、社会的共通価値の代用物となることがある。しかもアメリカ社会には、**カ**とプラグマティズムの伝統があり、獲得された知識は何らかのかたちで人間生活に役立てられなければならない、という考え方が根強くある。こうして優生学が学問としてかたちを整えるのとほぼ同時に、いくつかの州で断種法が成立していったのである。

このようなアメリカの動向を説明するのに、一八七〇年代のイタリアでロンブローゾによって精力的に行われた、犯罪と容貌の対応関係の研究や、H・スペンサーの諸著作などがアメリカで流行したことが挙げられることがある。また国内でも、この時代、自由教会派のJ・H・ノイエス神父が、優秀な人間だけが子供を作る性的な原始共同体を提唱し、実践しようとした。

しかし、**D**優生学の成立とアメリカへの伝播をおしすすめたのは、次に挙げるようなこの時期の生物学の進展が直接的な要因であったようにみえる。

その第一は、ワイズマン学説である。ダーウィンの進化論は、未知の遺伝理論を前提としていたから、進化論が受容されていくにつれて、昔からの大問題である遺伝理論に科学者の関心が向かったのは当然であった。しかし、それはまったく闇のなかにあった。さまざまな遺伝理論が提唱されたなかで、大きな影響力をもったのが、一八九二年に出たブライブルク大学教授、A・ワイズマンの『生殖質説——一つの遺伝理論』であった。

遺伝や発生現象の議論のなかで生まれ、一九世紀の生物学で頻繁に用いられるようになった言葉に「原基」がある。これは、形態の発生・分化を因果論的に考察していった末に必然的にその存在が要請される、形態発生のもとになる微小で不可視の原因のセットである。ワイズマン学説が広い支持を集めたのは、この原基が染色体に乗っているとする解釈を詳細に論じたからである。

ワイズマンは、当時一挙に明らかになった染色体の種ごとの安定性と遺伝現象とを結びつける一方、発生分化の現象を、細胞分裂によってこの原基が不均等に分配されていくのだとする、この時代としては完成度の高い理論を展開した。この説によると、体細胞一般と生殖細胞とはまったく別物で、生殖細胞のみが全原基を受け継ぐのであり、生物個体はそのつかのまの展開物となる。生殖質の連続ともいわれるこのワイズマン学説は、ラマルク型の獲得形質遺伝を全否定するものであり、これを人間に重ねると、環境改善や教育の効果は著しく小さいことを意味していた。この本は一八九四年に英訳が刊行され、アメリカでも多くの読者を獲得した。

第二は、ゴルトンらの研究である。ゴルトンは、遺伝形質の次世代の出現は統計学的な分布法則に従う、と信じた。そのため彼は、人間についても生物と同様に大量の測定をカンコウし、⁽⁴⁾厳格な統計学的処理を行った。彼は、人間の身長や胸囲が正規分布を示すことを確認して強い印象を受け、人間の精神能力もこのような分布を示すだろうと考えた。彼のイギリス経験論的な学風はK・ピアソンに受け継がれ、**キ**的に洗練されていった。ピアソンは一九〇七年に「確率——優生学の基礎」という講演を行ったが、聴衆の反応は鈍かった。

第三が、一九〇〇年のメンデル説の再発見である。メンデルの法則は、分割も増幅もできない遺伝単位を前提にしており、それは原基の考え方を単純化したものとも読むことができた。当然、ワイズマン学説とは強い「ク」があり、三人の学者によるメンデル説の再発見は、ワイズマン学説が浸透することでメンデル学説が見えるべくして見えてきた、という面がある。再発見された当座は、メンデル学説は雑種第一代以降の形質の出現頻度を正確に予測しうる数学的現象法則と考えられ、むしろワイズマン学説の正しさを証明するものとみなされた。一九二〇年代にアメリカでT・H・モーガンの遺伝子説が登場しても、メンデルⅡモーガン学説とせず、ワイズマンⅡモーガン学説とする教科書も、少なくなかった。

こうして、遺伝単位による遺伝現象の理解という態度は、「ケ」的に広がっていった。ただし人間の場合、血液のA B O型の遺伝を除けば、はつきりメンデル型の遺伝をするのはごく一部の病気にかぎられていた。一九〇二年にイギリスの医師A・ギャロッドは、アルカプトン尿症がメンデル劣性の遺伝形式に従う遺伝病であることを報告し、六年後に、生得的代謝異常は特定の酵素の欠陥によるのではないか、という一遺伝子一酵素説に近い考え方を提示した。

しかし、純生物学的な遺伝理論の発展は、この新理論を例外的な病気だけに適用するのはまったく逆の態度を鼓舞する時代的雰囲気になかにあった。自然科学主義の底にあるのは、単純化された因果論的解釈の「ヘンアイ」である。こうして世紀交代期には、すべての形質は生殖細胞に由来するはずだという、唯「生殖質的」人間観が漠然と広がっていった。それは、生活環境の改善や教育の効果を否定する主張でもあった。

(米本昌平ほか『優生学と人間社会』 講談社現代新書)

問一 傍線部(1)から(5)と同じ漢字を用いるものを、次の各群の①から⑤の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

- | | |
|---|-------------|
| ① | キジツを守る |
| ② | わずかなキボウ |
| ③ | キツコウ文字を解説する |
| ④ | ニツキを書く |
| ⑤ | キコウヘンドウが起こる |
- (1) キレツ

(2) ケイモウ

① おつりをケイサンする

② ケイリ課に異動する

③ ゼツケイを眺める

④ ケイヤクを結ぶ

⑤ 人権をケイハツする

(3) シカン

① 日常のシュウカン

② 準備をカンリヨウする

③ 授業をサンカンする

④ メンバーをカンユウする

⑤ カンゲイ会を開く

(4) カンコウ

① キャツコウを浴びる

② コウミヨウな仕掛け

③ リョコウに出かける

④ オヤコウコウをする

⑤ コウリツの学校へ通う

(5) ヘンアイ

① ヘンセイフウが吹く

② ガラスのハヘン

③ 季節がヘンカする

④ シュウヘンを探す

⑤ メールをヘンシンする

22

23

24

25

問二 空欄 **ア** から **ケ** にあてはまる言葉として最も適切なものを、次の各群の①から⑤の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

ア	① 性格	② 氏名	③ 地域	④ 家計	⑤ 家系	ア	26
イ	① 対立	② 従属	③ 共生	④ 拮抗	⑤ 優劣	イ	27
ウ	① 合理的	② 威圧的	③ 一元的	④ 感覚的	⑤ 文化的	ウ	28
エ	① 強烈な	② 脆弱な	③ 執拗な	④ 強靱な	⑤ 頑なな	エ	29
オ	① 道具	② 修正	③ 博愛	④ 官僚	⑤ 包摂	オ	30
カ	① 介助	② 自助	③ 補助	④ 援助	⑤ 救助	カ	31
キ	① 社会	② 公	③ 画期	④ 危機	⑤ 数学	キ	32
ク	① 偶然性	② 普遍性	③ 依存性	④ 相対性	⑤ 親和性	ク	33
ケ	① 飛躍	② 安定	③ 萌芽	④ 副次	⑤ 二次	ケ	34

問三 波線部 **A** 「欧米世界における知の構造的変動」とは何を指しているか。適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- ① 倫理や魂の救済
- ② 安定した世界解釈
- ③ キリスト教的世界解釈の崩壊
- ④ キリスト教的な自然解釈
- ⑤ 生物や人間の合目的性

問四 波線部 **B** 「一九世紀自然科学主義」とあるがどのような考え方か。適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- ① 観念や精神などにとつて根底的なものは物質であると考え、それを重視する考え方
- ② ある一つの原理だけであらゆるものは説明できないという考え方
- ③ 現実を理想化して捉えようとする考え方
- ④ 自然界の法則を超えた考え方
- ⑤ 人間以外の対象に人間的属性を投射して理解する考え方

問五 波線部C「社会全体を包含する見えない歯止めとしての共通価値が存在しにくい」とあるがどうしてか。適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えよ。

37

- ① アメリカでは集団主義が重視されているから
- ② アメリカでは周りの人たちと助け合うことが基本になっているから
- ③ アメリカでは理論や信念が行動よりも重視されているから
- ④ アメリカでは価値観や考え方が違うさまざまな人たちが共存しているから
- ⑤ アメリカでは法律にあまり重きが置かれていないから

問六 波線部D「優生学の成立とアメリカへの伝播をおしすすめた」とあるがその背景に何があったか。適切でないものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

38

- ① ワイズマンが完成度の高い理論を展開したこと
- ② 遺伝形質の次世代の出現は統計学的な分布法則に従うことが統計的に説明されたこと
- ③ 単純化された因果論的解釈が重視されたこと
- ④ 生活環境の改善や教育の効果が肯定されたこと
- ⑤ メンデル説が再発見されたこと

問七 本文における筆者の主張と合致するものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

39

- ① ゴルトンが優生学の父と呼ばれていることは全く重要ではない
- ② ダーウィンの『種の起原』は、西欧人に深刻な哲学的混乱を与えた
- ③ 優生学は、人間みずからが自然的運命を改良しようとすることを妨げた
- ④ はっきりメンデル型の遺伝をする原則は、多くの病気に共通していた
- ⑤ 近代と現代の境目は、第二次世界大戦にあった